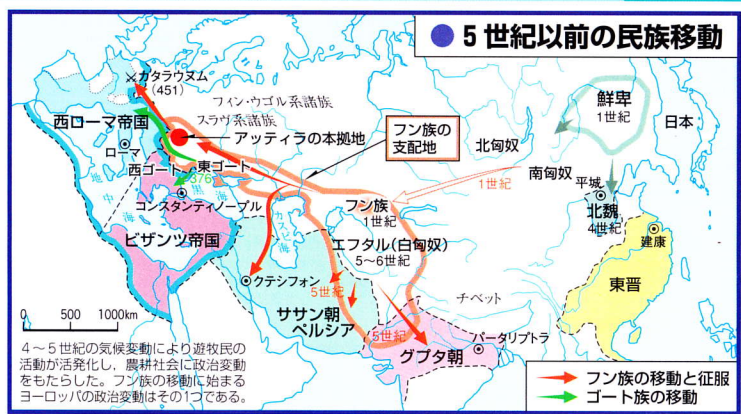
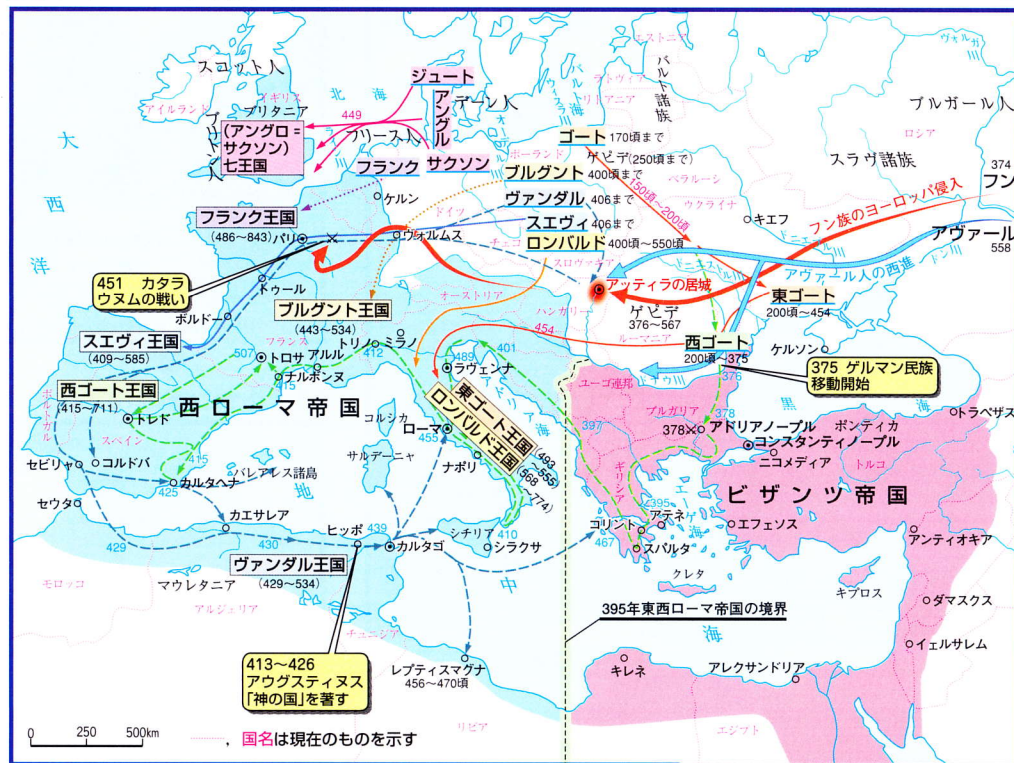


1 ゲルマン民族の大移動 (P.36 2地)



● アッティラ (ルーヴル美術館蔵) ● フン族とアッティラ (位433～453)

フン族は中央アジア原住の遊牧騎馬民族で匈奴の一派とされる。375年の東ゴート族征服、西ゴート族圧迫がゲルマン民族大移動の一因となった。フン族の王アッティラは教皇レオ1世に説得されローマ市侵入を断念した。

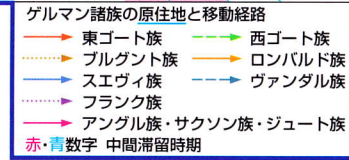


2 ゲルマン諸国家の変遷

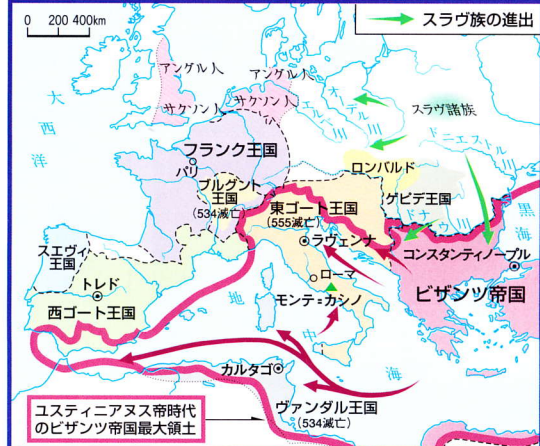
地域	イベリア	イングランド	フランス	ドイツ	イタリア	北アフリカ	小アジア
5世紀		449年 アンゴロサクソン族の侵入	443年 フランク王国	476年 西ゴート族の侵入	476年 西ゴート族の侵入	429年 ヴァンダル王国	
6世紀			486年 フランク王国	486年 フランク王国	486年 フランク王国	534年 ヴァンダル王国	
7世紀						534年 ヴァンダル王国	
8世紀							
9世紀							

● 解説 3世紀以降、ゲルマン人は平和的にローマ帝国領に移って、ローマの下級官吏や傭兵・コロヌスなどになっていた。これに対して、375年以降の移動は集団的・武力的であったといえる。民族移動により、すでに変質していたローマ社会の崩壊が促進され、ローマ=ゲルマン社会という中世ヨーロッパ社会の基礎がつけられた。(P.240 8史)

● 家族で移動するゲルマン民族



3 6世紀のゲルマン諸国家 (P.116 1地)



4 8世紀前半のゲルマン諸国家



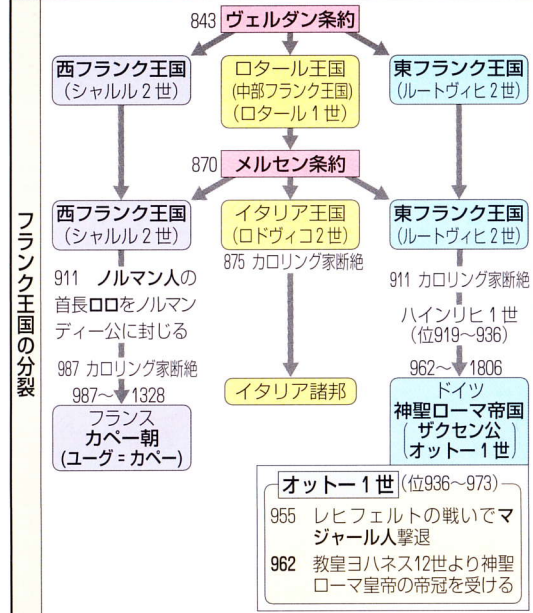
1 フランク王国の発展と分裂 (P361年) (P123年)

- ゲルマン民族の移動期
- 375 西ゴート族、南へ移動(ゲルマン民族大移動の開始)
 - 433 アッティラ、フン王となり、フン帝国繁栄(～453)
 - 451 カタラウヌムの戦い
…アッティラが西ローマ・西ゴート連合軍に敗北
 - 476 西ローマ帝国滅亡。オドアケル王国建国(～493)

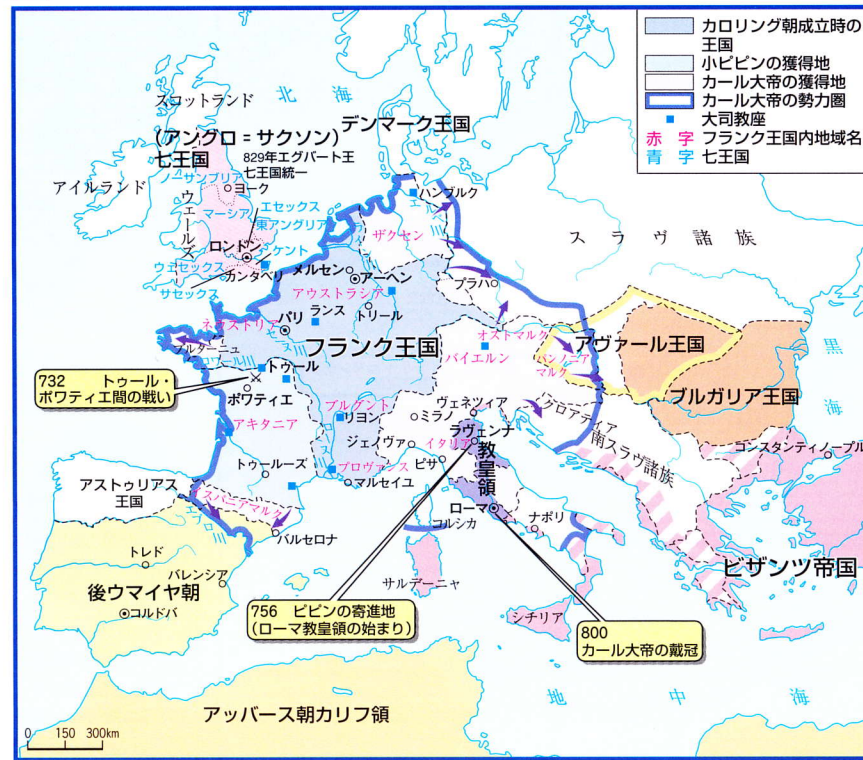
- メロヴィング朝とフランク王国の発展
- クローヴィス(位481～511)
 - 486 フランク王国(メロヴィング朝)建国
 - 493 東ゴート王テオドリック、イタリアに侵入
→東ゴート王国を建国
 - 496 アタナシウス派(カトリック)に改宗
 - 568 ロンバルド(ランゴバルド)族、北イタリアに建国
この頃、イギリスは、アングロ=サクソン族の七王国時代
 - 711 イスラム教徒(ウマイヤ朝)の侵入で西ゴート王国滅亡
 - 726 ビザンツ皇帝レオン3世、聖像禁止令発布
 - 732 トゥール・ボワティエ間の戦い…宮宰カール=マルテル率いるフランク軍がイスラム教徒(ウマイヤ朝)の侵入を撃退

- カロリング朝と西ローマ帝国の復興
- 小ピピン(ピピン3世)(位751～768)
 - 751 カロリング朝をおこす
 - 756 ロンバルド族を討ち、ラヴェンナ地方を教皇に寄進(ピピンの寄進)…ローマ教皇領の始まり

- カール大帝(シャルルマーニュ)(位768～814、フランク王国最盛期)
 - アルクィン(英)を招く(カロリング=ルネサンスの中心人物)
 - 800 教皇レオ3世より西ローマ皇帝の帝冠を受ける
 - 巡察使を派遣して伯を監督させる (P240[1]史)
 - 829 ウェセックス王エグバート、七王国を統一(イングランド王国の起源)



2 カール大帝時代(800年) (P100[3]地)



A ヴェルダン条約(843年)



B メルセン条約(870年)



カール戴冠の意義 (P240[1]史)

カールの戴冠は形式的には西ローマ帝国の復活であるが、実質的にはローマ文化・ゲルマン文化・キリスト教の3要素が同化した新しい国家の誕生を意味する(西ヨーロッパ世界の成立)。皇帝権は、世界を統一する支配者の「ローマ帝権」に、「キリスト教保護者」の意味が加わったキリスト教皇帝権となった。1つの帝国の中に、教権を代表する教皇と、俗権を代表する皇帝とが並立して存在する西ヨーロッパ封建社会が形成された。

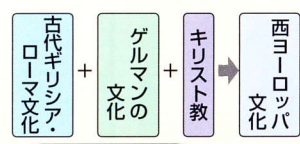
カールの戴冠 シュネツツ画(9世紀) ルーヴル美術館蔵



西ヨーロッパ世界の形成

クリスマスはキリスト教の祝祭典の中で日本でも最もよく知られているが、クリスマスに欠かせないツリーの起源はローマとゲルマンにある。古代ローマでは12月に農神祭を行い、太陽の復活・春の再生・豊饒を願い冬の木を飾った。またゲルマンでは、木のもつ生命力に神秘性を感じ、木の精霊崇拝を行っていた。

現在のようなツリーの原型は17世紀頃に現れ、19世紀のアメリカで豪華な飾り付けをするようになった。

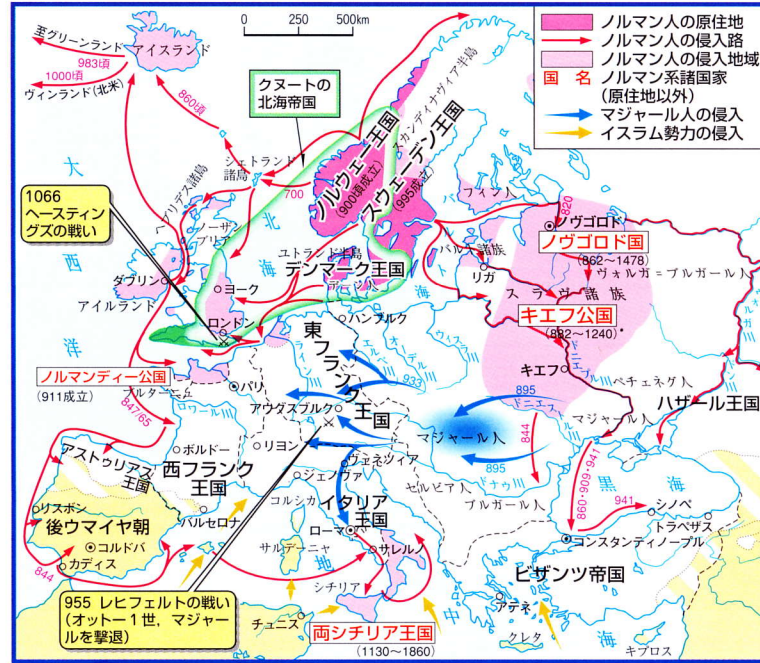


他の文化融合の例

6月24日 聖ヨハネの日
…ゲルマンの夏至祭り(火祭り)



1 ノルマン・マジャール・イスラムの侵入 (P100B地)



① 解説 9~11世紀のヨーロッパは、北からノルマン人、東からマジャール人、南からイスラムに侵入されていた。これに対し地方領主が相互防衛契約を結んだことが、封建社会形成の一因となった。



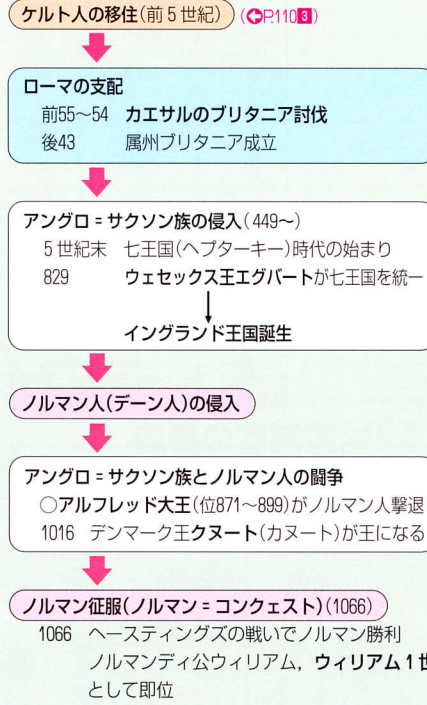
② ヴァイキングの祭り(シェトラランド諸島) 北欧を中心として、各地でヴァイキング祭りが行われていることから、彼らの活動範囲が広大であったことがわかる。

③ ヴァイキングの船

10tの積荷でも水深が1.3mあれば航行できた



2 イングランドの形成



④ ノルマン人のイギリス征服 ノルマンディー公ウィリアム率いるノルマン騎士団と、アングロ=サクソン歩兵軍の戦闘を描いた刺繍画(タピストリー)の一部。幅約50cm、長さ70m パルー教会蔵

● 英語の中のフランス語

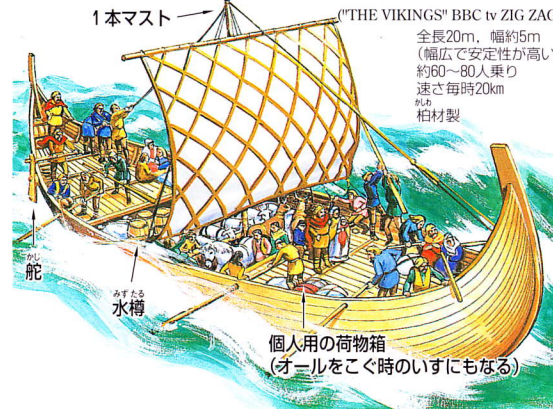
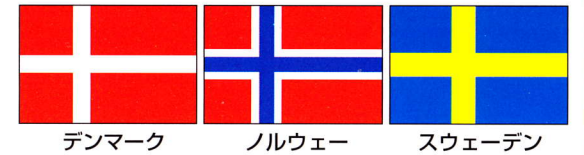
英語の語源の約半分はフランス語からである。ノルマン征服以降、アングロ=サクソン系とフランス系の言葉が融合し始めた。庶民関連はアングロ=サクソン系、上流階級関連はフランス系の言葉が多い。

*当時の庶民(農民)は家畜を飼うだけでその肉は食べられなかった。また、パンを焼く道具はなく、家も自分で建てなければならなかった。

アングロ=サクソン系	フランス系
ox, cow(牛)	beef(牛肉)
sheep(羊)	mutton(羊肉)
baker(パン屋)	carpenter(大工)

スカンディナヴィアクロス — 北欧諸国の形成 — (P173B)

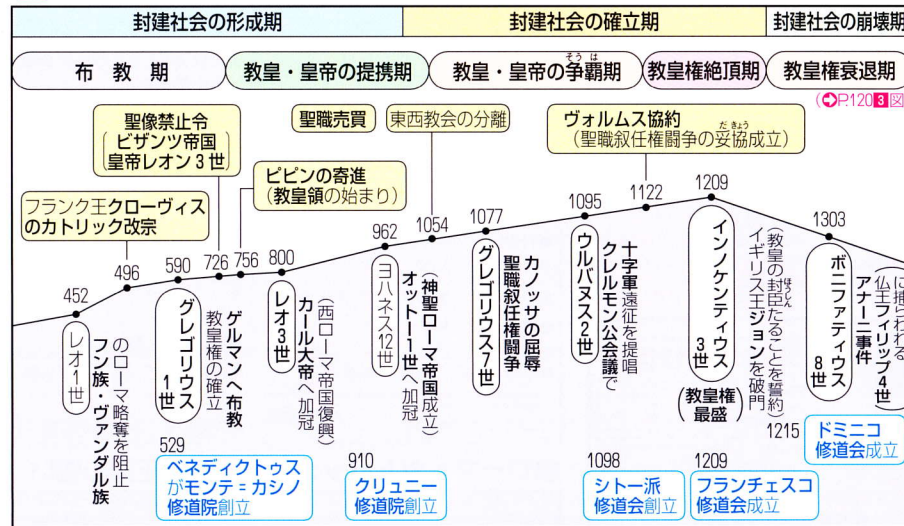
北欧諸国の国旗は、色の違いこそあれ共通のスタイルを持っているが、これは13世紀初頭のデンマークによるエストニア遠征の際に用いられた十字旗がもとになっている。北欧諸国の中で、特にノルウェー・スウェーデン・デンマークは、14世紀にカルマル同盟を結ぶなど、ときに摩擦を生じつつも強い絆を維持してきたと言える。



⑤ ノルマンディー海岸(セーヌ川河口付近)



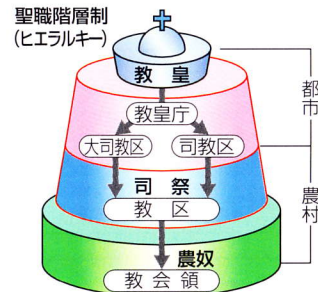
1 ローマ = カトリック教会の発展 (P371年) (P120年)



2 宗教分布



3 ローマ = カトリック世界の構造

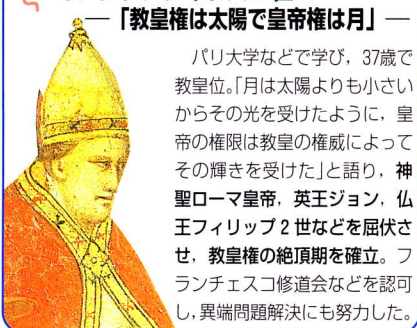


4 カノッサの屈辱



カノッサの屈辱 (1077) 聖職叙任権闘争により教皇グレゴリウス7世に破門された神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世は、北イタリアのカノッサで赦しを乞うた。写真は、トスカナ女伯マティルダとクリュニー修道院長に教皇へのとりなしを頼むハインリヒ4世。ヴァチカン図書館蔵

インノケンティウス3世 (位1198~1216)



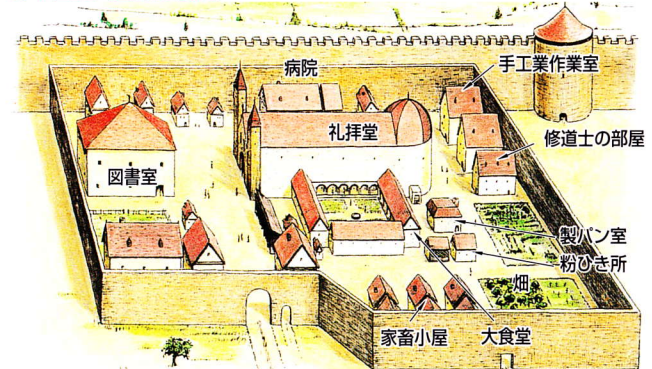
5 修道院の果たした役割

解説 修道院は修行の場であると同時に生活の場でもあるので、自給自足のための施設が備えられている。また、修道士は余暇を学問に費やしたので、修道院は中世の文化の中心でもあった。

● 修道院の聖務日課 (シトー派修道会・6月の例) (シトー会修道院|平凡社)

1時	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
起床	朝課	一集課	集會	労働	三時課	ミサ	読書	六時課	午食	午睡	九時課	労働	晩課	夕食	終課	就寝			

● 中世の典型的修道院



- 529 **モンテ・カシノ修道院** (Monte Cassino) ベネディクトゥスがイタリアのモンテ・カシノに創立。「祈り、働け」がスローガン。1113 聖ベネディクトゥス会則制定
- 910 **クリュニー修道院** (Cluny) アキテーヌ公が南フランスのフルゴニユに創立。ベネディクトゥスの戒律を厳守。教会刷新運動の中心
- 1098 **シトー派修道会** (Cistercians) 聖ロベルトゥスがフランス中部のシトーに創立。荒地の開墾に努力
- 三大宗教騎士団** (Military Orders): 聖地巡礼者の保護と異教徒の討伐
 - ヨハネ騎士団 (1113)
 - テンプル騎士団 (1119)
 - ドイツ騎士団 (1190)
- 托鉢(たくはつ)修道会** (Poor Preachers): 清貧を理想。財産所有を否定。民衆の喜捨を受けて遍歴しながら説教活動を行う
- フランチェスコ修道会** (Franciscans) (イタリアのアッシジ)
- ドミニコ修道会** (Dominicans) (フランスのブルーイユ)

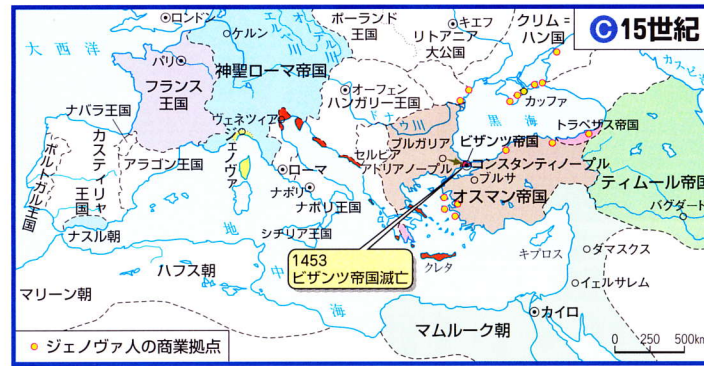
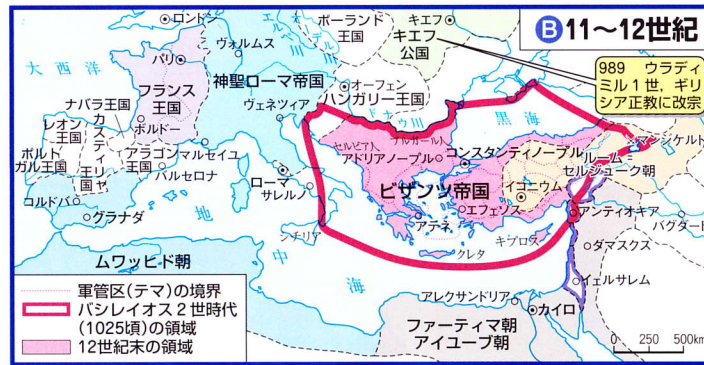
● イタリア旅行で人気の町アッシジ

フランチェスコの出身地。淡いピンクの石の建物が並ぶ中世そのままの町である。教会が町の半分を占めている。



1 ビザンツ帝国の変遷 (P361年)

ビザンツ帝国(東ローマ帝国)	西アジア
330 ローマ帝国、ビザンティウムへ遷都 コンスタンティノープルと改称	
395 ローマ帝国、東西に分裂	
初期(ローマ的伝統の維持)	ササン朝ペルシア
ウテオス朝 330	
431 エフェソス公会議 (ネストリウス派を異端とする)	
518 ヌステ朝 518 ヌステ朝	
ユスティニアヌス帝(位527~565)	
533 「ローマ法大全」完成	
537 セント=ソフィア聖堂完成	
●官僚制整備	
●地中海帝国の再建	
610 オハラ朝 610 オハラ朝	
ヘラクレイオス1世(位610~641)	
●軍管区制と屯田兵制を採用	
●中央集権体制を強化	
●ギリシア語を公用語とする	
717 イサウリア朝 717 イサウリア朝	
レオン3世(位717~741)	
726 聖像禁止令(→聖像崇拜論争)	
●皇帝教皇主義確立	
843 聖像崇拜復活(最終的解決)	
867 東西両教会、相互に破門 (分離促進)	
バシレイオス1世(～886)	
○ビザンツ文化の復興	
1036 セルジューク朝 1036 セルジューク朝	
1054 東西教会の分離	
●ギリシア正教会の成立	
●プロノイア制導入(帝国の封建化)	
1071 マンジケルトの戦い	
1095 アレクシオス1世	
ローマ教皇に救援を要請 (十字軍の原因)	
1204 ラテン帝国建設→小アジアに逃れる 亡命国家ニケーア帝国を建設 再興	
1299 オスマン帝国 1299 オスマン帝国	
1453 ビザンツ帝国滅亡 (P107地、134地)	
後期(国内の分裂・衰退)	



2 西ヨーロッパとビザンツ帝国の比較

西ヨーロッパ諸国		ビザンツ帝国	
●世俗権力(皇帝・国王)と教皇権の二元構造	政治	●皇帝が政・教両権を握る皇帝教皇主義	政治
●封建制度の成立と世俗権力の地方分権化	政治	●中央集権の官僚体制と軍管区(テマ)制	政治
●荘園制(農奴制)に基づく自給自足経済	経済社会	●国家統制による商工業(貨幣経済)の発達	経済社会
●11世紀以降貨幣経済が浸透	経済社会	●自由農民・屯田兵制が存在	経済社会
	経済社会	●プロノイア制で封建化進行	経済社会
●ローマ的・ゲルマン的文化	文化宗教	●ギリシア文化と東方文化の融合	文化宗教
●ローマ=カトリック	文化宗教	●ギリシア正教	文化宗教
●キリスト教・ゲルマン民族・古典文化を融合した中世ヨーロッパ世界形成	歴史上の意義	●古典文化を保存・継承し西欧へ伝える	歴史上の意義
	歴史上の意義	●西欧世界の防波堤の役割	歴史上の意義

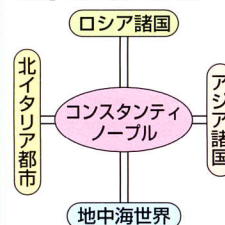
●ローマ=カトリックとギリシア正教の違い

ローマ=カトリック	ギリシア正教	
ローマ教皇 (政治権力と宗教権力の分離)	宗主権	コンスタンティノープル総主教 皇帝教皇主義 (皇帝が政治・宗教の両権を掌握)
ローマ (サン=ピエトロ大聖堂)	総本山(中心)	コンスタンティノープル →モスクワ(15世紀以降)
聖像崇拜を布教に利用	聖像崇拜	聖像禁止令(726~843) →イコン(聖像画)崇拜
●体系的・思弁的な神学が発達(13世紀、スコラ哲学の完成=信仰と理性の統一)	教義・その他	●原始キリスト教の精神を継承(義よりも愛、十字架よりも復活、罪よりも救い) ●信仰体験・復活祭を重視

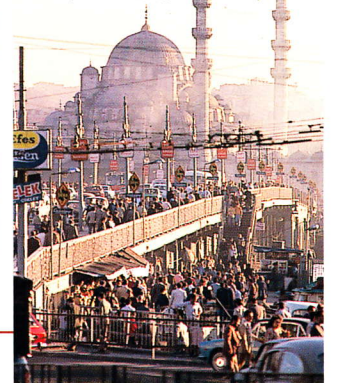
商都コンスタンティノープル

アジアとヨーロッパの接点に位置するコンスタンティノープルは、330年、ローマ皇帝コンスタンティヌスの遷都以降、1923年まで都として繁栄した。現在、人口740万のトルコ最大の都市であり、商業・観光の中心として「永遠の都」であり続けている。

●人々で賑わうイスタンブル(ガラタ橋附近)



イエニ=モスク



●セント=ソフィア聖堂 ヌスティニアヌス帝がコンスタンティノープルに建立したビザンツ式の代表作。オスマン帝国時代に尖塔を付けモスクとした。

●ユスティニアヌス帝 ラヴェンナ(北イタリア)のサン=ヴィターレ聖堂のモザイク壁画。彼は旧ローマ帝国領を回復。「ローマ法大全」を編纂させた。

